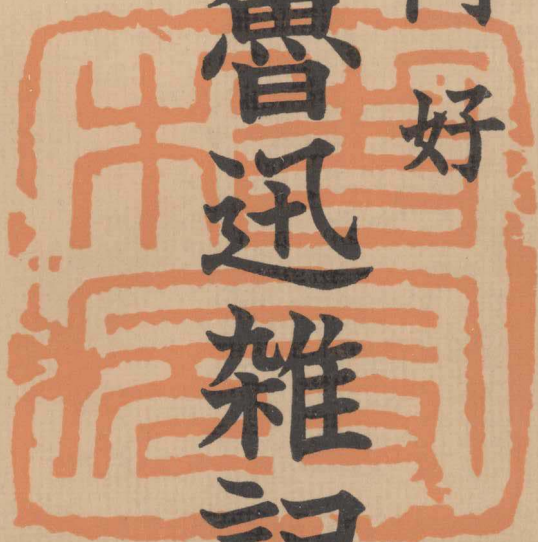


竹內好

續魯迅雜記



勁草書房

竹內好

續魯迅雜記

勁草書房

著者紹介

1910年 長野県に生れる

1934年 東京大学文学部卒

著訳書 「現代中国論」「竹内好評論集」

「魯迅文集」「中国を知るために」他

続 魯迅雑記

1978年 2月25日 第1版第1刷発行

◎著 者 ^{たけ}竹 ^{うち}内 ^{よし}好

発行者 井 村 寿 二

発行所

株式会社 勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15

電話 (03) 814-6861

振替 東京 5-175253

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

浩文社印刷・和田製本

*定価はカバーに表示してあります。 0095-859300-1836

*無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

目次

第一部

歴史における魯迅―魯迅文学の入門のために―	3
『魯迅選集』別巻の編集を終えて	39
『魯迅選集』の再刊にあたって	41
『魯迅選集』の改訂に際して	43
魯迅と演劇―霜川達志氏とのインタヴューから―	48
改訳を前にして思う	51
三度目の正直	58
日本における魯迅の翻訳	60
『魯迅文集』訳者のことは	99

新訳『魯迅文集』について……………100

マンガ世代に期待する「週刊朝日」杜氏とのインタヴューから―……………105

魯迅を読む……………107

第二部

『魯迅友の会会報』から……………129

発刊にあたって 魯迅の読まれ方の一例 御あいさつ 疑問と
要望に答える 第十三号・ごあいさつ 第十四号・雑記 加藤
勝美さんに答える 第十五号・雑記 第十六号・雑記 第十七
号・雑記 第十八号・雑記 第十九号・雑記 第二十号・雑感
第二十二号・雑記 第二十三号・雑感 第二十四号・雑感 第
二十六号・雑記 第二十七号・雑記 第二十八号・雑記 第二
十九号・雑記 第三十号・雑記 第三十一号・雑記 第三十二
号・雑記 第三十三号・雑記 半沢正二郎さんのこと 緊急の
報告と提案 高倉氏の投稿について 竹内芳郎氏の論文の転載
に当って 第四十号・おぼえ書き 第四十一号・おぼえがき
うめぐさ 世の中は…… 訳業のろのろ進行

第三部

魯迅とその時代へ対談Ⅴ

(尾崎秀樹／竹内好) …… 247

編集付記

飯倉照平 …… 287

竹内好による魯迅翻訳目録

初出覚え書

第一部

歴史における魯迅

——魯迅文学の入門のために——

はじめに

魯迅のごく簡単な伝記は、この選集^{*}の第一巻の解説で述べてある。本巻の「魯迅年譜」と対照すれば、あらましの魯迅の経歴がわかるだろうと思う。それから、魯迅の著作活動について、それらが書かれた時代環境や、そこでの魯迅の姿勢については、留学時代から歿年まで、順を追って、各巻の解説で述べてあるから、学術著書や翻訳はこの選集では省いてあるけれども、それは本巻の「魯迅著訳書目録」で補うことにして、あらましの魯迅の仕事ぶりが、読者にわかってもらえらるだろうと思う。それからまた、それらを総括した全体の魯迅の意味については、人物、思想、芸術、学問、それぞれの側面を、いろいろの立場から見た論稿（座談会をふくむ）が本巻にあり、さらに、中国で、日本で、および諸外国で、これまで魯迅がどう読まれ、どう理解されてきたかの歴史的な評価の変遷の見取り

図も、別巻にのっているから、それらを参考にしながら、読者はおの自分の自分で、自分なりの魯迅像をえがき、または確かめることができるだろうと思う。

* 「この文章は一九五六年に刊行された岩波書店版『魯迅選集』の別巻である『魯迅案内』のために執筆された。同選集は一九六四年に改訂版が刊行されたが、このさい『魯迅案内』は絶版とされ、同巻所収の「魯迅年譜」「魯迅著訳書目録」「参考文献」だけは、改訂版の第十三巻に手を加えて収められた。」

そこで、ここには何を書くかというと、以上のいろいろの魯迅論、魯迅解説と、多くの部分で重なっているが、しかし、それらに盛り切れなかった、盛り切れぬであろう部分、一口に言くと、歴史における魯迅、といったものを素描してみたい。魯迅を、与えられたものとして、最初からクロージ・アップしてあつかうのではなくて、最初は埋もれた、生れないままのものとしてあり、それが次第に、歴史的に形成されてゆく、その筋道をたどることにしたい。読者にとって既知の魯迅——直観的に、あるいは論理的に構成されて、とらえられている魯迅の像を、もう一度、歴史の中でとらえ直す、再構成する手続きをふむことにしたい。そうすることによって、読者の魯迅理解を深める一つの助けとしたい。それがこの稿のねらいである。

魯迅を、歴史から切りはなして、あつかうことはできるし、必要でもあるだろう。魯迅の理解へ踏み込むということは、究極には、それぞれの人の今の問題（生の問題）にかかわることである。それは魯迅ばかりでなくて、多くのすぐれた文学について言えることかもしれないが、ことに魯迅の場合

は、そうではないかと思う。強く、生の意識をゆすぶられる。間接にでなく、直接に、生そのものの実感をせまられる。そこからある種の、衝撃がやってくる。自分および自分の周囲を、改めて見直し、改めて考え直すことを強いられる。そういう受け取り方をする人が、魯迅の読者には、縁あって魯迅を発見した人には、多いのではないか。私の知っている、何人かの魯迅の読者、いくつかの魯迅研究のグループを見廻してみても、どうもそういう気がする。

そういう読者にとっては、歴史における魯迅は、問題にならないかもしれない。少くとも一義的には、問題でないだろう。また、問題でなくてかまわぬのである。しかし、そういう読者でも、ある程度は、ある範囲では、どういうやり方にせよ、魯迅を一度歴史に還元する操作を、やっている場合が多いのではないか。そういう操作を中間にはさむ作業のくり返しがなくては、理解の深まり、対象への接近ということが考えられぬので、やはりやっていると考えていいのだろう。だから、そういう魯迅の読者にとっても、何ぶん目かの整理の手がかりとして、この稿は無意味ではないのではないかと思う。一方歴史過程を頭にうかべるのが困難（その困難にはいろいろ理由がある）なために、はるかに魯迅の像を望みながらそれに近づけない、そのため、まだるくてならない、という読者——いわば可能的読者——これも相当いるのではないか。いや、実際に、私の知っている範囲でも、いるのである。だから、そういう人たちのためには、どういう形であれ、完成された魯迅像をもち出すわけにはいかないで、どうしても、前提条件の方を固めてかからねばならない。なにも無縁な人を魯迅の読者に

引込もうというのではなくて、魯迅を読みたい気はするが取っつきにくい、また読んでもよくわからぬ、という人のために、その困難の一部を除くために、歴史的形成の過程を取り上げることは意味があるだろうと思う。

魯迅はむつかしい、という声をよくきく。そのむつかしさの性質は、おそらく複雑である。今日の中国人が難解と感ずる点と、今日の日本人が難解と感ずる点とは、大いにちがうだろう。むしろ今日の中国人が難解と感じ出した点が、今日の日本人には難解でなくなりつつある点と一致している、というような皮肉な関係もあるかもしれない。このことについては、いまここで論じるわけにいかない。おそらく、むつかしさの性質は、それぞれの人により、千差万別なのである。ただ、むつかしいという一点では、多くの人の意見が一致している。あまり魯迅はやさしいという人は、いないように思う。中国でもそうであるし、日本でもそうである。諸外国でも、そうでないかと想像する。ただ西洋の場合は、むかし日本でそうであったように難易さえ問題にならぬ、それ以前の、いわば無関心がまだ多いのではないかと思うが、この点もここでは触れることを省く。ともかく、魯迅がむつかしいというのは一般の声であって、それは正しいのではないかと私は思う。これには私など研究者、紹介者の怠慢ということも関係するが、それ以上に、魯迅のむつかしさは、魯迅文学の本質にかかわる問題ではないかと思う。むろん、その中に、技術的に除けるむつかしさも、ないわけではないが、それはごく一部であって、たといそれを除いたにしても、依然としてむつかしさは残るだろう。ただ、む

つかしきの所在がハッキリするだけである。

ここで、その本質的なむつかしさに、直接に迫るわけにはいかない。歴史過程を通して見るということは、文学の理解にとつては、必要ではあるが不可欠ではない、あくまで補助手段である。それがわかれば文学がわかる、という性質のものではない。ただ、それがわからぬために、わかるはずの文学がわからぬ、あるいは、何がわからぬかがわからぬ、という状態に対して、一つの整理には役立つというだけのことである。そして、そういう整理の必要を感じている人が存外多い、ということも事実のようである。だから魯迅文学の入門の手引きとして、そのような中間の操作をここでやってみよう、というわけである。スペースも限られているし、私の能力も決定的に不足しているので、どれだけ成果があがるか、おそらく大したことはあるまいが、そういう手引きがこれまで割にないので、とにかく大ざっぱなところで試みることにする。

方法は、魯迅の生涯からいくつかの時期を重点的に取り出して、そのそれぞれの時期の世態、時代思潮、文学の流れなど、魯迅との関係で問題になるものをえらび、魯迅を取り巻く環境を、ある側面から照らすのである。魯迅の精神形成史を、一般歴史の立場から眺めるのである。なるべく読者が疑問をもつような点を、指標にえらぶことにしたい。

幼少年期

魯迅のうまれた一八八一年は、アヘン戦争から四十年、太平天国の崩壊から十六年たっている。そして日清戦争までには、まだ十四年ある。当時の大清帝国の年号で光緒七年、日本の明治十四年に当る。

そのころの中国の社会状態は、一口に言うところ、封建社会が徐々にくずれて、次第に半封建・半植民地の姿になり変ろうとしている時期であつた。ここで「半封建・半植民地」と言つたのは、今日普通に行われている歴史規定にしたがつたのだが、その内容は、帝国主義諸列強が中国の分割を争い、一方、国内では軍閥（軍閥というのは、封建色の濃い地方政權のことで、同時にそれは列強の利益代表を兼ねている）が覇をきそうといった、つい二、三十年前までの中国の姿を指しているのである。こういう姿に中国が決定的になつたのは、一九一一年の辛亥革命によつて清朝が倒れてからのことで、それ以前は、まだ清朝の威信が辛うじて保たれており、封建的な統一状態が、徐々に崩れながらもまだつづいていた。

その崩れつつある封建社会とは、どういう社会であつたかというところ、日本の徳川時代などとは、かなりちがつていた。人間が支配者と被支配者に分れていることは、中国でも同じだが、中国の封建時代の支配層は、日本のような武士ではなかつた。中国の支配層は官吏であり、官吏は武士とちがつて、制度上は身分的特権をもたず、世襲でもなかつた。官吏はすべて、国家試験によつて、全国民の中から平等の資格でえらばれる。ちょうど明治以後の日本での文官試験のようなものである。この試験を科挙かきよという。科挙には、いくつかの段階があるが、どの段階の試験でも、当時の公認の学問である朱

しぐ
子学を内容とした、一定の嚴重な形式をもった文章（これを八股文はつこぶんという）を出題に依じて作らせるのである。

制度上は、だれでも科挙を受けられることになっていたが、そのためには猛烈な受験勉強が必要なので、実際には、よほど金とひまのある階層の子弟でないと、学問させてもらえなかった。そのような階層は、多くは地主であり、時には富裕な商人である。地主はたいていは高利貸を兼ねている。そのような階層は、それぞれの地域で、自然に固定して、一種の身分を形づくっている。官吏は世襲ではないが、官吏を多く出す家柄は、その地域地域でほぼ固定して、名門となっている。これが紳士である。学問する人を意味する「読書人」という言葉と、官吏の身分をあらわす「士大夫」という言葉と、地方の実力者である「紳士」とは、内容上はほとんど同一物である。

ひとたび科挙に合格して、官吏の有資格者となれば、将来のあらゆる栄達が保証されている。試験に合格したというだけで、その人は一種の封建的特権を取得し、金と名誉が向うからこるがりこむのである。官吏という地位は、中央官にしろ地方官にしろ、それぞれなにがしかの役得を伴っているが、そのほかに、たとい任官しないでも、また退官した後でも、官吏の有資格者、つまり士大夫だということだけで、社会的にいろいろの便宜がある。魯迅の小説「阿Q正伝」に出てくる趙旦那チヤオと錢旦那チエンとは息子が文童（受験準備中の少年）だというだけで、それが村人から尊敬をかちえる理由の一つになっている。この文章が試験に合格して、次の正規の試験への受験資格を獲得すれば（これが秀才である）、本人

の名誉はもとより、家柄もいっそう上るのである。その代り、この試験に受からなければ、みじめである。秀才になれぬのは、紳士の仲間に入れぬことである。そのような没落読書人が、魯迅の小説にはよく登場する。たとえば、「白光」の主人公は、十六回目の試験に失敗して発狂した。「孔乙己」の主人公は、コソ泥を働くほどおちぶれても、自分が読書人であるという自負だけは忘れていない。

秀才の中から举人がえらばれ、举人の中からさらに進士がえらばれる。この二段階が、正規の科挙である。日本の例でいうと、普通文官試験と高等文官試験に当る。最高段階の進士になればむろんのこと、そこまで行かずに举人の段階に止ったにしても、その社会的地位は相当のものである。たとえば「阿Q正伝」に出てくる白^{バイ}举人のように、百里四方にその名を呼ぶものがなく、その家に雇われたというだけで阿Qが尊敬される、といった具合である。

魯迅の家は、祖父が進士だった。父親は病弱のため早くに仕官の志を捨てたが、ともかくその家格は、白举人よりも上である。魯迅のうまれた紹興の町は、古い文化のある、昔から有名な学者や政治家をたくさん出した町なので、「阿Q正伝」に誇張してえがかれている舞台と同列には見られないが、それにしても、相当の名門であると考えてよからう。物質的にも、魯迅のうまれたころ、周家には四、五十畝^ムの田地があったというから、この地方としてはかなりの地主である。

それが魯迅の少年時代に、祖父の下獄事件と父親の病氣のために、一挙に没落したのである。だから、この事件が魯迅に与えた打撃の大きさは、想像されよう。ことに魯迅は長男だった。もっとも、

中国は日本とちがって、長男だけが家督相続するわけではない。相続は厳格な均分相続である。だから、長男だけに家の重荷がかかってくるわけではないのだが、兄弟の中のいちばん年かさというだけでも、少くとも心理的には、長男は責任を感じやすい地位である。そして魯迅は、性格的にも、人一倍それを感じやすい人だった。そのことは、文章からもわかるが、何よりも、四歳ちがいの弟の周作人との関係が、よく物語っている。留学時代から北京時代へかけて、彼は親代りのように弟の世話をよく見ている。この二人は中年になってから絶交するが、それには、思想の問題や、家族同士の感情のもつれが原因であるにしても、そのほかに、中年までの度を越えたと思われるほどの深い庇護関係を念頭におかないと、解けぬ謎のように思う。

少年時代に家の没落を経験したこと、ことに、それが厳格な封建的階層制の維持されている社会での出来事であること、これは伝記上および文学上見のがせぬことである。後者についていえば、たとえば魯迅の小説に没落読書人がよく登場するのは、このことと無関係ではない。没落読書人ばかりでなく、その後身ともいべきインテリゲンツィア（余計者）がよく登場する。こういう人間タイプの造型は、直接には、辛亥革命後の反動期の心理状況の下での産物であるが、その素材は少年時代の観察の蓄積の中にあり、そのような観察が可能になるためには、封建制度を裏から眺める位置に一度は立っている必要があった。

そのことに関連して、文学と伝記の両方にまたがることであるが、彼の作品にあらわれている農村